

# 遠隔授業による 小児看護学実習の教育実践

日本看護研究学会雑誌  
2022, 44(5), 697-706  
©2022 日本看護研究学会  
<https://doi.org/10.15065/jjsnr.20210421128>

入江 亘, 菅原明子, 塩飽 仁  
東北大学大学院医学系研究科

## 要 旨

目的：A大学における遠隔授業形式による小児看護学実習の教育実践の実際を報告し、効果的な遠隔形式での実習のあり方を検討する。方法：実習はA大学看護学専攻4年次を対象に、1グループ10名で計30名に対し2020年5月から7月に開講した。授業設計と教育実践の評価は学生の授業評価から行った。結果：授業の総合評価の平均は $4.72 \pm 0.46$ だった。受けた教育や遠隔授業形式で行われたことへの学生の意見としては、【教員と良好なコミュニケーションのなかで学べた】、【じっくり考えることができた】、【他の人の考えに触れる機会が多かった】、【臨床実習に近い学びとなった】といった前向きなものと、【個別に相談できる機会が少なかった】、【時間がタイトだった】といった課題に関するものが挙げられた。結論：効果的に学生が学びを深めるために、従来の臨床実習との授業設計の変更点の共有や、学生の省察を促す視点の洗練が重要である。

## キーワード

オンライン授業, 新型コロナウイルス感染症, 授業設計, 授業評価, 学び

責任著者：入江 亘. Email: [wirie@med.tohoku.ac.jp](mailto:wirie@med.tohoku.ac.jp)

## 序 論

新型コロナウイルス感染症（以下COVID-19）の流行が人の生活に甚大な影響を及ぼしている。学生の学習環境への影響もまたその一つであり、特に看護学生においては臨床実習の中止により、現場での体験的な学習が困難な状況となっている。日本看護系大学協議会が2020年4月に全国の看護大学に行った調査では、実習体制について83.5%の大学が変更または変更を検討中と回答し、さらに実習施設からの延期や中止の要請を51.3%の大学が受けたと報告している。A大学看護学専攻においても、2020年度前期の臨床での実習が中止となり、授業設計の組み直しとオンラインを中心とした遠隔授業による実習を行ってきた。

臨床での実習ができないなかでの実習のあり方について、文部科学省（2020a；2020b）は、実習施設の代替が困難である場合、実状を踏まえ実習に代えて演習または学内実習等を実施することにより、必要な知識及び技能を修得することとして差し支えなく、面接授業に相当する教育効果を有する遠隔授業等により代替することが可能であり、これらの授業により必要な単位もしくは時間を履修して卒業した場合も、従来どおり国家試験の受験資格が認められる、といった方針を示している。

一方で、学内演習や遠隔授業によって、これまで臨床で学ぶことで得てきた知識や技能の修得を具体的にどのよう  
に図っていくのかについては、各大学の裁量に委ねられている。したがって、実際に教育にあたったなかでの学生の授業に対する評価や学習成果、授業を体験したなかでの気づき、教育上の課題や工夫といった実践知を集約していくことが重要である。特に小児看護学実習では、健康障害の有無を問わず様々な発達段階にある子どもの成長発達の理解や援助を学ぶことから、実際に子どもや家族とのかかわりの機会がないなかで、創造性を膨らませ、具体的な援助へとつなげていくための知見を集約することは急務である。2020年12月には日本看護系大学協議会よりCOVID-19に伴う看護学実習への影響調査結果として、全領域実習の64.2%で遠隔授業への変更が行われ、各大学、実習領域で視聴覚教材や事例の活用がなされていることが報告された。しかし、遠隔授業での小児看護学実習が具体的にどのような授業設計され、教育実践を行っていくなかでどのような課題や工夫がなされたか、そして受講した学生からどのような反応があったのかは、全く報告されていない。

これらを明らかにすることは、今後遠隔授業による小児看護学実習を企画している大学の教育の質向上や、さらにポストコロナにおいても、遠隔授業の利点を活用した小児

看護学実習の教育実践に寄与できると考えられる。

そこで本実践報告では、A大学における遠隔授業による小児看護学実習の教育実践の実際を報告し、受講した学生の授業に対する授業評価と意見をもとに、効果的な遠隔授業での小児看護学実習のあり方を検討することを目的とした。

なお、本実践報告をまとめるにあたっては、東北大学大学院医学系研究科倫理委員会の承認を得た（承認番号：2020-1-551）。教育実践の評価に用いた学生の授業アンケートデータの使用にあたっては、すべてのデータは匿名化された情報として入手、分析されていることを、情報公開文書により周知した。

## I. 教育実践事例

### 1. A大学における遠隔授業での小児看護学実習の概要

遠隔授業による小児看護学実習は2020年5月から7月に、A大学看護学専攻4年次を対象に、1グループ10名で3クール、計30名に対して開講した。A大学における小児看護学実習は「子どもと家族の総合的理解と援助の過程に、小児看護学等で学習してきた知識・理論および技術を適用し、看護診断と看護援助の実際および小児保健医療チームにおける看護者の役割を体験的に学習する」ことを基盤とし、(1)子どもの成長発達段階の理解と個々の成長発達段階に応じた看護援助に必要な知識、技術、態度を学ぶ、(2)健康障害が子どもおよび家族に及ぼす影響について学ぶ、(3)病気や障害をもつ子どもを個別的に理解し、知識と技術を統合して、根拠に基づいて看護実践できる能力を養う、(4)子どもの療育環境、地域や他職種との連携・協働について知見を深める、(5)小児看護の特徴と小児医療チームにおける看護者の役割と責任について学ぶ、の5点を目的としている。遠隔授業で行う際にも、これまでの形式の目的を踏襲しながら、遠隔授業に合わせた学習目標を設定し実習展開を行った(表1)。

実習の展開は、(1)健康な子どもの成長発達とその援助、(2)健康障害をもつ子どもと家族へのケアの2つに大別され、これらから小児看護の特徴とケアの視点の拡大・学びの統合を図る。健康な子どもの成長発達とその援助は、遠隔授業導入前は保育所での2日間の臨床実習であったが、子どもの生活場面の動画視聴による観察演習と、COVID-19による子どもの生活への影響を子どもの権利と照らし合わせて考え、看護職としての実践の提言を行う課題演習に再構成した。健康障害をもつ子どもと家族へのケアでは、小児への注射薬の調剤・投与における留意点とその科学的根拠について学ぶ技術演習、事例を用いて実践に向けたケアの思考過程とコミュニケーション方法を議論す

表1 遠隔授業での小児看護学実習の学習目標

1. 子どもの成長発達を理解し、それらに影響を与える諸因子を多角的にとらえることができる。
2. 病気や障害、医療行為が子どもに及ぼす影響を理解できる。
3. 小児医療チームにおける看護者の役割と責任について理解できる。
4. 子どもの療育環境、地域や他職種との連携・協働について理解を深めることができる。
5. 子どもをとりまく危険因子をとらえ、安全確保のため適切に対処できる。
6. 子どもを的確に観察して判断し、看護実践に反映することができる。
7. 対象の個別性の理解および対象に合わせたコミュニケーションについて理解を深めることができる。
8. 子どもの各成長発達段階におけるセルフケア確立のための援助を考えることができる。
9. 家族がかかえる問題を理解した援助、指導を考えることができる。
10. 子どもの成長発達は心身両面にわたって個人差があることを理解し、人格や権利を尊重する看護を実践できる。
11. 子どもや家族の総合的理解に基づく看護過程を通して、QOL (Quality of Life) の維持・向上を目指した看護を実践し評価できる。
12. これらの視点を統合して小児看護の特徴と小児医療チームにおける看護者の役割と責任について考え、表現できる。

注) 表中の下線部は、従来の実習の学習目標から遠隔授業となるために修正した箇所である。従来の実習では8.は「援助できる」、9.は「指導できる」としている。

る事例課題ロールプレイ、仮想事例2例についての事例看護展開と、それらの事例に含めた倫理的な場面に対するアプローチ方法の検討によって展開された。事例看護展開は病院での臨床実習の代替と位置づけ、その他の演習は遠隔授業導入前と同様の内容を遠隔授業で行った。小児看護の特徴とケアの視点の拡大・学びの統合では、医療を必要としながら地域で暮らす子どもや、生命を脅かされる子どもへのケアについて視聴覚教材をもとに考える視聴覚教材演習や実習全体のディスカッション、個別面接により行った。視聴覚教材演習は医療型障害児入所施設での臨床実習の代替と位置づけた。授業展開の詳細は表2に示した。

### 2. 教育実践内容

#### (1) 授業設計と学習環境の調整

まず、授業設計では、遠隔授業での実習と臨床実習の目的の設定を検討した。遠隔授業でもこれまでの形式の目的を踏襲した実習展開にするという方針を基盤とした場合に、限られた環境下で臨床実習と同等の実習目的の到達を見据えるためには、授業内容の焦点化が必要であると考え、本来病院や保育所等、臨床で学ぶ科目としての特徴で

表2 遠隔授業形式での小児看護学実習における授業展開

実習の枠組み	主な目的	内容	
健康な子どもの成長発達とその援助	観察演習	乳幼児の日常生活を観察することで、健康な子どもの成長発達を理解やそれらに影響を与える因子を多角的にとらえ、安全確保やセルフケア確立への支援を考える。	乳児と幼児について、意識的に観察したい内容をまとめ、各自Web上の動画を探索し子どもの日常生活場面を観察する。その内容を発表・議論する。議論のうち、認知・社会面の発達や援助者の視点について深める方向付けをしたうえで、追加教材の動画を提示し、それを踏まえて改めて援助者としてのあり方・かかわり方を議論する。
	課題演習	子どもの成長発達とQOL (Quality of Life) に根ざす子どもの権利とその課題を理解し、子どもの生活における権利遵守の重要性やそれを実行していくための実際的な思考を学ぶ。	子どもの権利に関する既有知識を活性化し、グループでCOVID-19による子どもの生活への影響を探索する。そのうえで、学生が注目したい影響を決め、それについて看護職として子どもの最善の利益を考えた際にとるべき方策を提言する。各グループの提言をもとに議論する。
健康障害をもつ子どもと家族へのケア	技術演習	小児への注射薬の調剤・投与における留意点とその科学的根拠について学ぶ。	事前学習のうえで、各グループで注射薬作成過程とその留意点、小児を対象とするうえでの配慮すべき事項をまとめる。その後学生の考えた作成過程に沿って教員が注射薬を作成し視覚的に共有する。
	事例課題 ロールプレイ	観察演習で学んだ成長発達の特徴や援助者の視点を踏まえて、子どもと家族にかかわる際に配慮・工夫すべき点や、疾病や子どもが受ける医療に関して知識に基づく多角的な観察を行うための視点を、想定場面を体験するなかで考える。	設定した事例の訪室場面について、各グループで患者や家族、看護師の配役を決めたうえで、目的にあるような視点を意識しながら発表の準備をする。ロールプレイ発表後は学生同士で目的に関する視点を議論し、病態や当日の状況に基づく追加的な視点を教員が投げかけ、議論を深める。
	事例看護展開	病気や障がいをもつ子どもを個別的に理解し、知識と技術を統合して、根拠に基づいて看護実践でできる力を養う。小児看護の特徴と小児医療チームにおける看護者の役割と責任について考える。	仮想患児2例について、2グループに分かれて電子カルテに模した画面での情報収集、記録や動画、写真等の日々追加される情報をもとにした看護過程の展開と、事例に含まれる倫理的な場面に対するアプローチ方法の検討を行う。
	視聴覚教材演習	子どもの療育環境、地域や他職種との連携・協働について知見を深める。生命を脅かされる状況にある子どもと家族へのケアのあり方を学ぶ。	小児在宅や小児緩和ケアに関する事前学習教材の視聴と事前学習をもとに、子どもの療育環境の実際を共有する。また、生命を脅かされる状況にある子どもに関する視聴覚教材を、子どもと家族が大切にしていることに注目しつつ、それぞれが気づいた点をシェアしながら視聴し、援助者としてのあり方を議論する。

ある「臨床の実際理解」と「看護実践における倫理的視点」が損なわれないよう配慮することに重点を置き設計することとした。また、本来の実習内容と遠隔授業による実習内容の関係性や差異を学生が理解していないと各演習の位置づけが曖昧になると考え、遠隔授業での実習の各内容が臨床実習のどの部分を置き換えた内容であるかを各演習や実習全体のオリエンテーションで説明した。

学習環境の調整では、第一に、教育機関によってオンラインでの教育環境と、学生の通信環境の整備が進められた。教育機関は、学生にGoogle Classroom<sup>TM</sup>やGoogle Meet<sup>TM</sup>をはじめとしたGoogleの各種オンライン機能をリソースとして提供した。また、自宅で通信環境やパソコンの準備が困難な学生には、教育機関からのパソコンやWi-Fiルーターの貸与、あるいは体調を確認のうえ、許可を与えて来学のうえで学内のWi-Fi環境を使用してもらった。そのうえで、COVID-19の流行により学生の図書館への立ち入りが禁じられる措置等による自己学習のための学習資料へのアクセスの支障、学生の遠隔授業でのグループダイナミクス形成の難しさを想定した。前者に対して

は、オンラインで閲覧可能な書籍やオンライン上の信頼できる資料の収集に関するアナウンスを授業に組み込むこととし、後者に対しては実習初日に画面共有やチャット、グループ単位のワーク用のURLへの移動、共同作業のためのツールといった機能の活用を意図した時間と、オンラインでのグループ対抗ゲームといったアイスブレイクを導入し、遠隔での授業環境の調整を図った。

実習期間においては、一日中遠隔で実習が行われたことによって体調不良や疲労を訴える学生が複数みられたことから、休憩時間の確保やウェブカメラをOFFにする時間を設定するなど、学生が集中する時間とリラックスできる時間の両面を確保できるよう調整した。また、実習中の学生の意見として、授業時間以外での学生同士の資料準備や交流のための場がないことが挙げられたことから、教員が入らないオンラインのURLを設定し、授業以外に学生同士が共同学習をしたり話ができるような環境を作った。さらに、通信環境の乱れによる授業の中断が度々生じたことから、余裕のある授業の時間的枠組みを再設定した。このほかにも、オンライン上では1名のみの発言が基本であ

り、全員の意見をそれぞれ表明していくことが、ワーク等の進行に時間を要する一因になっていると考えた。

そこで、疑問点や感想を各自に考えてもらい、その後共有する形式のワークの際は、それぞれの考えをリアルタイムに文字で共有できる Google Jamboard™ を積極的に活用した。

### (2) 健康な子どもの成長発達とその援助に関する教育実践

遠隔授業での実習に能動的な活動を取り入れることを目的に、観察演習、課題演習いずれも、子どもの生活に関する動画資料や COVID-19 による子どもへの影響について学生が自己探索する時間的枠組みを設けた。加えて、学生の探索した動画や資料が限定的な視点とならないよう配慮した。例えば観察演習では、視聴する動画の内容が親子やきょうだい関係に関するものに集中したり、一部の年齢に偏る可能性が考えられたことから、同世代の子どもの交流や支援者としてのかかわりの視点、年齢の幅における社会性の発達の視点が深まるよう、子どもの集団生活をとらえた動画教材を追加学習として課すなどした。

また、既有知識の活用を通じた実践的な理解の深まりにも注目した。課題演習では、実習前に学習した子どもの権利の理解を活性化する時間を設けたうえで、現実的な課題に照らし合わせていずれかの看護職の立場を設定し思考することを課し、知識を実用することに力点を置いたワークと課題に対する方策提言の発表の場を設けた。

### (3) 健康障害をもつ子どもと家族へのケアに関する教育実践

いずれの内容も遠隔授業であったことから、技術的な面で臨床の実際的な視点を理解する点よりも、観察や思考面における臨床の実際的な視点の体験に重きを置いた内容とした。例えば事例看護展開では、模擬カルテを作成し、既に集約化された患者情報から看護診断を行うのではなく、アセスメントに必要な情報と不要な情報を自ら選択するプロセスを体験できるように配慮した。また、情報には動画教材や図などを用いて個々の学生が個々の視点で患者情報をとらえられるようにし、さらに観察や思考の連続性を体験できるように、毎日情報を更新することでアセスメントや計画を展開する機会を提供した。思考面においては、健康な子どもの成長発達とその援助において考えた子どもの権利の視点を応用して考える題材として、事例に含まれる倫理的な場面に対するアプローチ方法の検討の場を設けた。一方、考える場の提供のみでは実際の現場での応用場面に結びつけることが難しいとの学生の反応があったことから、看護師が実際に倫理調整を行っている視聴覚教材の視聴を追加し、実際のケアへの活用につけられるような内容に修正した。観察や思考面における臨床での実際の理解と合わせて、ケアを実践するうえで重要な相互作用によるコ

ミュニケーションを体験する枠組みを事例課題ロールプレイおよび事例看護展開にて複数設定した。実際の演習では、各グループで患児や家族、看護師の配役を決めたうえで、患児の発達段階や状況を想定して必要なかわりやケアの視点について考え、実演した。実演は集合型で行うことができなかったため、小児のシミュレーターモデルを患児役とし、家族役と看護師役を教員が担当して、細かな行動を教員と打ち合わせしたうえで、学生それぞれの視点を遠隔画面上に共有した状態で行った。実演後は必要なかわりやケアの視点を議論し、コミュニケーションやアセスメントに基づく観察のあり方を深めた。事例展開は、5名で1事例を考えるグループとして2事例を準備し、グループ単位あるいは全体での遠隔授業と、学生ごとに学習を進める時間を半日単位程度で設けて進めた。具体的な遠隔授業の展開としては後述のとおり5日間の日程で行った。1日目は従来の臨床実習での内容に視覚的な情報を加えたオリエンテーションと各事例の提示、2日目はグループ単位で事例の病態や疾患の理解についてプレゼンテーションのうえ看護上の問題点やケアの視点を議論、3日目は2グループ合同で看護アセスメントおよび看護計画の発表と議論を行った。さらに、4日目は各グループで事例のケア場面についてロールプレイ内容を検討のち、合同で発表および議論、5日目は倫理に関する既有知識の活性化を目的とした合同での講義のち、グループ単位で各事例に生じた倫理的課題の整理と方策の検討を目的としたワーク、全体でのプレゼンテーション、および議論で構成された。グループ単位の活動では教員が定期的に各グループのフォローアップを行った。

資料の配信や各演習で課したレポートの提出、レポートに対するコメントは、すべて Google Classroom™ を用いてオンライン上で行った。

## II. 教育実践の評価

### 1. 評価方法

教育実践の評価は、授業終了時に学生が回答した授業アンケートから抽出した。授業アンケートは回答のあった29名のデータを分析した。

授業アンケートの内容は(1)実習に対する自身の取り組み、(2)授業内容や方法、(3)教育の質、(4)授業全般の評価、(5)教育内容や遠隔授業を通じた意見で構成され、(1)～(4)については各設問様式に合わせて自己学習を除きリッカート式5段階にて、(5)については自由記述により尋ねた。自己学習は、学習時間に応じて6段階で尋ねた。5段階のリッカート式の回答は、授業の進度を「5. 速すぎる」から「1. 遅すぎる」を除き、得

点が高いほど評価が高いことを示す。自由記述は意味内容の類似性から質的帰納的にまとめた。カテゴリ名は【 】で示す。

## 2. 評価結果 (表3)

### (1) 実習に対する自身の取り組み

授業への参加意欲に関しては、意欲的22名 (75.9%)、やや意欲的6名 (20.7%)と9割以上が意欲的と回答した。得点化すると平均は4.72、標準偏差は0.53だった。1週間当たりの自己学習時間では、5時間以上25名 (86.2%)、4時間程度1名 (3.4%)、3時間程度3名 (10.3%)だった。2時間程度、30分～1時間程度、なしとの回答は0名だった。得点化すると平均は5.76、標準偏差は0.64だった。

### (2) 授業内容や方法

授業が系統的に整理されていたかという問いに対しては、そうである25名 (86.2%)、ややそうである4名 (13.8%)だった。得点化すると平均は4.86、標準偏差は0.35だった。

説明はわかりやすかったかに関しては、そうである23名 (79.3%)、ややそうである5名 (17.2%)だった。得点化すると平均は4.82、標準偏差は0.39だった。

授業の進度は適切であったかという問いに対しては、速すぎる1名 (3.4%)、やや速い6名 (20.7%)、ちょうど

よい21名 (72.4%)、わからない1名 (3.4%)であり、2割以上の学生が速いととらえていた。得点化すると平均は3.29、標準偏差は0.54だった。

資料やスライド、映像は見やすかったかに関しては、そうである21名 (72.4%)、ややそうである7名 (24.1%)、あまりそうでない1名 (3.4%)だった。得点化すると平均は4.66、標準偏差は0.67だった。

成績評価に関する十分な説明があったかについては、そうである15名 (51.7%)、ややそうである9名 (31.0%)、どちらともいえない3名 (10.3%)、そうではない1名 (3.4%)、わからない1名 (3.4%)であり、そうであるとの回答は約5割に留まった。得点化すると平均は4.32、標準偏差は0.95だった。

授業概要 (要項やシラバス) に沿った内容であったかについては、そうである22名 (75.9%)、ややそうである5名 (17.2%)、わからない2名 (6.9%)だった。得点化すると平均は4.81、標準偏差は0.40だった。

### (3) 教育の質

教員は疑問や考え、意見に耳を傾けてくれたかという問いに対しては、かなり傾けてくれた25名 (86.2%)、まあ傾けてくれた4名 (13.8%)だった。得点化すると平均は4.86、標準偏差は0.35だった。

教員は役立つ助言やサポートをしてくれたかという問いに対しては、かなりくれた21名 (72.4%)、まずまずくれた7名 (24.1%)だった。得点化すると平均は4.75、標準偏差は0.44だった。

教員は誠実な態度で教育に臨んでいたかについては、とてもそう思う28名 (96.6%)、おおむねそう思う1名 (3.4%)だった。得点化すると平均は4.97、標準偏差は0.19だった。

教員の学びへの貢献はどの程度であったかという問いに対しては、かなり貢献した27名 (93.1%)、まずまず貢献した2名 (6.9%)であった。得点化すると平均は4.93、標準偏差は0.26だった。

### (4) 授業全般の評価

専門科目としてふさわしいかという問いに対しては、そうである28名 (96.6%)、ややそうである1名 (3.4%)だった。得点化すると平均は4.97、標準偏差は0.19だった。

実習を通して新しい知識や技能を獲得できたと思うかという問いに対しては、そうである26名 (89.7%)、ややそうである2名 (6.9%)だった。得点化すると平均は4.93、標準偏差は0.26だった。

授業の総合評価では、非常に良い21名 (72.4%)、良い8名 (27.6%)だった。得点化すると平均は4.72、標準偏差は0.46だった。

表3 学生による授業評価の結果

(n=29)

評価項目	平均点 (標準偏差)
1. 実習に対する自身の取り組み	
(1) 授業参加意欲	4.72 (0.53)
(2) 自己学習時間	5.76 (0.64)
2. 授業内容や方法	
(1) 授業の系統整理	4.86 (0.35)
(2) 説明のわかりやすさ	4.82 (0.39)
(3) 授業進度の適切さ	3.29 (0.54)
(4) 資料や映像の見やすさ	4.66 (0.67)
(5) 成績評価の説明	4.32 (0.95)
(6) 授業概要に沿った授業	4.81 (0.40)
3. 教育の質	
(1) 教員の応答的態度	4.86 (0.35)
(2) 教員の助言やサポート	4.75 (0.44)
(3) 教員の誠実さ	4.97 (0.19)
(4) 学びへの貢献	4.93 (0.26)
4. 授業全般の評価	
(1) 専門科目としてのふさわしさ	4.97 (0.19)
(2) 新しい知識や技能の獲得	4.93 (0.26)
(3) 総合評価	4.72 (0.46)

Note. 得点が高いほど評価が高いことを示す。評価項目1.(2)を除き1-5点の5段階。1.(2)は1-6点の6段階。2.(3)授業進度の適切さは3が「ちょうどよい」を示す。

(5) 授業評価アンケートの自由記述における意見

授業評価アンケートの自由記述では、小児看護学実習で受けた教育に対する意見と遠隔授業で行われたことに対する意見をそれぞれ求めた。

まず、受けた教育に対しては31の意見が挙がり、その内容は【丁寧なフォローアップがあった】、【自身で考えるためのサポートがあった】、【教員と良好なコミュニケーションのなかで学べた】、【学習教材が充実していた】、【授業展開の意図をくみ取れた】、【学びが良かった】といった前向きな意見と、【個別に相談できる機会が少なかった】といった課題に関する意見の計7カテゴリで構成された(表4)。

次に、遠隔授業で行われたことに対しては27の意見が挙がり、【じっくり考えることができた】、【他の人の考えに触れる機会が多くあった】、【学習を進めやすい環境だった】、【臨床実習に近い学びとなった】、【休憩の確保により疲労は少なかった】といった前向きな意見と、【時間がタイトだった】、【通信環境に左右された】、【オンラインの機能をより活用してほしい】といった課題に関する意見の計8カテゴリで構成された(表5)。

Ⅲ. 考 察

本実践報告では、A大学における遠隔授業による小児看護学実習の教育実践の実際を報告し、受講した学生の授業に対する授業評価と意見をもとに、効果的な遠隔授業での小児看護学実習のあり方を検討することが目的であった。

授業評価の結果からは、学生は遠隔授業における小児看護学実習のなかで新たな知識や技能を獲得したととらえ、授業全体についても概ね高く評価していた。また、教員のフォローアップや学生と教員間の良好なコミュニケーションを評価する視点が学生の意見より示されていた。これらから、学習設計としてどのような学びの視点がどのように置き換えられた授業構成となっているのかを学生と教員が共有しながら進めたことが、学生の学びの深まりにつながったと考えられた。さらに、遠隔授業で行われたことに対する学生の意見からは、【じっくり考えることができた】、【他の人の考えに触れる機会が多くあった】と、遠隔授業であることで従来の臨床実習に比べ学びが深まった視点がみられた。本実践では、「臨床の実際の理解」としての小児や家族とのかかわりや小児の非言語からの情報の把握と、アセスメントや「看護実践における倫理的視点」を考える視点として定めたが、遠隔授業の実習のなかで何を

表4 受けた教育に対する学生の意見

カテゴリ	代表的な意見
【丁寧なフォローアップがあった】	<ul style="list-style-type: none"> <li>・理解が追いつかなかった時も、丁寧に解説してくれた</li> <li>・修正したものも何度も見てもらい、修正後の評価もしてくれた</li> <li>・個別指導が充実している点がとてもよかった</li> </ul>
【自身で考えるためのサポートがあった】	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分で考えることを促してくれたため、考える力を身につけるにつながった</li> <li>・具体的なアドバイスと考える方向性を示してもらったので、自分でどのように考えたら良いのかを明確にしながら、自己学習を進めることができた</li> <li>・考える道筋を示してくれたところがとてもありがたかった</li> </ul>
【教員と良好なコミュニケーションのなかで学べた】	<ul style="list-style-type: none"> <li>・質問しやすい環境を整えてもらえた</li> <li>・ディスカッションでは毎回フィードバックをもらい、自分たちの学びがさらに深まった</li> <li>・進捗状況を見ながらその日の予定を変更したり、柔軟に対応してもらえて良かった</li> </ul>
【学習教材が充実していた】	<ul style="list-style-type: none"> <li>・資料が乏しいことを汲み取って様々な資料を提供していただいたのもとても有難かった</li> <li>・参考資料や動画教材がとても充実していて、とても学びやすい環境だと感じた</li> </ul>
【授業展開の意図をくみ取れた】	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1週目から3週目までの学びの流れがくみ取りやすく、知識や考え方が積みあがっていく過程を感じながら実習をこなしていくことができた</li> <li>・実習の中で何度も要項の目標や意義の部分に触れていたことで、自分が実習に参加する中で何を意識したら良いのかが明確に理解できた</li> </ul>
【学びが良かった】	<ul style="list-style-type: none"> <li>・様々な配慮があり大変学びが良かった実習となった</li> <li>・実習の枠組みに沿って行われていたので、実際に患児に会えなかったこと以外はほとんど従来の実習と同じことを学べたと思う</li> </ul>
【個別に相談できる機会が少なかった】	<ul style="list-style-type: none"> <li>・直接話す機会が少なく、聞きたい時に個別で疑問点を聞くことができなかった</li> <li>・全体で集まって行うディスカッションも非常に自分の学習には効果的であったが、1日1回個別で先生と話す時間があると良いと感じた</li> </ul>

表5 小児看護学実習が遠隔授業で行われたことに対する学生の意見

カテゴリ	代表的な意見
【じっくり考えることができた】	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生同士で意見を出し合ったりすることで、幅広い視点を取り入れることができ、学生間で多くの新たな気づきを得られた</li> <li>・オンライン実習では自分の頭で考えなければいけない環境なので、自分で考える力を伸ばすことができた</li> <li>・病院に行かない分ディスカッションが多かったが、この形式の実習を通してたくさん「考える」時間があり、小児看護の特徴や意義についてとても詳しく考えて学ぶことができた</li> </ul>
【他の人の考えに触れる機会が多かった】	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ディスカッションの機会が増え、他の人の考えに触れることが増えた点よかった</li> <li>・オンライン上ならではのグループワークやディスカッションが多くて、みんなと意見を共有して学びを深めたり、複数の事例について考えられたのが良かった</li> </ul>
【学習を進めやすい環境だった】	<ul style="list-style-type: none"> <li>・オンラインであったことで、調べたいことをすぐに調べられることが良かったオンライン上でのグループワークであり同時編集が有効だった</li> </ul>
【時間がタイトだった】	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループワークの時間が短く、ロールプレイの設定作りやパワーポイントを作るのが難になってしまった部分があった</li> <li>・ロールプレイの準備時間など、グループワークの時間が短かったように思う。実習時間外ですることも結構あり、少し負担に感じた</li> </ul>
【臨床実習に近い学びとなった】	<ul style="list-style-type: none"> <li>・臨地で実習したかったという思いが強まったが、オンラインの中でも現場に近い学びを得ることができるような工夫や、オンラインならではの強みを活かして立ち止まって考える機会が作られていた</li> <li>・病棟に行けない分を動画視聴などで補えるようになっており、子どもについて理解しやすかった</li> </ul>
【通信環境に左右された】	<ul style="list-style-type: none"> <li>・電波やネットの接続状況に実習の質が左右されてしまうので、そこが残念な点だった</li> <li>・授業開始前、オンラインミーティングに入れるのが時間ギリギリなのが気になった。きちんとつながるのかの確認がしたかった</li> </ul>
【オンラインの機能をより活用してほしかった】	<ul style="list-style-type: none"> <li>・Google Classroom<sup>TM</sup>の機能を使って目的の内容のストリームにすぐにとどり着ける工夫があったら有難かった</li> </ul>
【休憩の確保により疲労は少なかった】	<ul style="list-style-type: none"> <li>・オンラインということで疲労を考慮して適度に休憩をはさんでくださったので有難かった</li> <li>・パソコンに向き合う時間が多く眼精疲労が心配でしたが、休憩を挟みつつできたのでそこまで辛く感じることはなかった</li> </ul>

深く考えることを方向づけるか、またどのような他の人と接する機会を設けるかといった授業設計上の工夫が、遠隔授業での学生の学びをより深くすると考えられた。

第一に、学生は遠隔授業で行われた小児看護学実習を系統的に整理されていたととらえ、また実習を通して新たな知識や技能を獲得したととらえており、授業の総合評価の平均としても $4.72 \pm 0.46$ と概ね高く評価していた。学生の意見にもみられたように、臨床実習に比べて一つ一つをじっくり考えることができること、他の人の考えに触れたり、自身の意見を表現する機会が多く設定されたことは、学生の新たな気づきの機会につながり、授業評価の高さとして表れたと考える。加えて、学生の学習意欲に働きかけるアプローチを授業設計段階で多く検討した点も授業評価に貢献した可能性がある。Keller, J. M. (2009/2010) は学習意欲を高める側面として、注意、関連性、自信、満足感を挙げており、これらに働きかけることが学習者の意欲を引き出すと述べている (p.47)。本実践報告において遠隔授業での実習を受けた学生は、本来臨床実習を予定していたにもかかわらず、突如遠隔による実習への切り替えを伝

えられ、学習意欲の低下が特に懸念される集団であった。本実践では、遠隔授業での実習において動画教材やグループワークのように個々で着眼点が広がっていく可能性がある課題に対する着眼の視点をまずシミュレーションする機会を設けたり、関連性の視点を重視し従来の臨床実習と対比しながら、学習設計としてどのような学びの視点がどのように置き換えられた授業構成となっているのかを丁寧に学生と教員が共有しながら進めた。学習目標の達成において、教員と学生間で授業過程を通して目標を確認、共有することの重要性は看護演習における先行研究でも示されており (宮芝・舟島, 2008, p.18)、こうした共有は遠隔授業においても、教員と学生が良好なコミュニケーションのもとで学習目標に向かって実習を展開していくための重要な要素となっていたと考えられた。他方、教員のフォローアップや相互の良好なコミュニケーションの視点は臨床実習の教育においても重要とされる事柄である。しかし本事例の特性上、実習指導者がおらず教員と学生間のコミュニケーションが中心であったことや、遠隔環境という実体験に制約のある実習下において、教員のフォローアップや相

互の良好なコミュニケーションのもとで実習が行われることの重要性は、学びの方向性を見失わない配慮のなかで特に意識化された視点であると考えられた。

授業評価アンケートを別角度からとらえると、成績評価の説明に対する評価は項目全体のなかで相対的にみると低く、遠隔授業での学習環境に関する課題も散見された。成績評価について、授業の逆向き設計理論を提唱したWiggins, G.とMcTighe, J (2005, p.17)は、成績評価方法の検討を、学生の学習成果を測定する指標の検討と位置づけ、授業方法の計画よりも前にデザインすることが、学習の効果を最大限にする授業デザインにおいて重要としている。本実践では、開講約1ヶ月前に遠隔授業が決定した等の背景により、学習目標の検討のうえですぐに授業内容の検討に入ったため、結果として成績評価の視点が不明確なまま実習を開始し、学生への説明が十分にされなかったことが要因の一つと考えられた。遠隔授業での実習が行われる際の各レポートの配点やルーブリック評価表の作成といった枠組みの検討は、遠隔授業が今後も行われる可能性がある場合に予め準備しておくことが円滑な授業準備につながると考えられる。また、準備期間が限られたなかでも、教育上の学習目標の検討と合わせて学生からみた学習成果の視点を組み込む過程を踏むことで、学習成果と成績評価、授業展開の一貫性が高まると考える。さらに鈴木(2006)は、オンラインのアクセスのしやすさや通信速度、安心感といった学習環境について、レイヤーモデルを示すなかで、学習の質の最も根底となる要素であることを示している(p.338)。学生からは通信環境の課題やオンライン機能の活用について意見が挙がっており、これらの意見をやむを得ないことととらえず、自宅の通信環境の問題が解決しない場合には学内等の学べる環境を調整する等、学習の質に直結する重要な要素としてとらえることが重要であると考えられる。

第二に、遠隔授業で実習が行われたことに対する学生の意見から、【じっくり考えることができた】、【他の人の考えに触れる機会が多くあった】といった利点が明らかとなった。吉田ら(2016)は、小児看護専門看護師7名へのインタビューから、小児看護学実習で目指す学生の学びの要素の一つとして「子どもの立場になって子どもの体験を捉える」ことを挙げている(p.57)。本実践では臨床実習と同様に子どもの生活環境に実際に身を置く体験を準備することはできなかった。一方、自ら子どもの生活をイメージする思考を学習展開に組み込んだうえで学生が動画を探索することや、倫理的観点から子どもが置かれた状況を察知する思考の体験、さらに実際の倫理調整の事例について視聴覚教材を活用しながら議論することを実践した。学生はこれらの体験を通して、遠隔環境においても子どもの立

場について深く考えたり、他の人の考えに触れる機会をもつことができ、こうした省察を促される経験が学びの深まりに寄与したと考えられた。本実践では特に考える要素として「臨床の実際の理解」としての小児や家族とのかかわりや小児の非言語からの情報の把握と、アセスメントや「看護実践における倫理的視点」を含め、小児看護学実習という実習の領域の特性に関する熟考や多様な意見と接する機会につながったものと考えられた。各専門領域実習において何を考えることを方向づけるか、また実習中に他の学生のもつ幅広い着眼点や意見に接する機会をどのように設けるかについて工夫することが、遠隔授業での学生の学びをより深くすると考えられる。

加えて、より実際の現場の声を体験できる機会が提供されることは、当事者が体験していることを深くとらえることにつながると期待できる。今回の遠隔授業では実現することが難しかったが、直接的あるいは遠隔による対象や医療者との交流を設定するなど、実習施設の協力も得ながら学生教育の質を高める方法も検討の余地があると考えられる。

本実践は遠隔による授業が浸透していない2020年前期のものであることや、半年間の臨床実習を既に経験している学生が対象であったことから、遠隔での授業が浸透しつつある状況下の学生や臨床実習経験のほとんどない学生にそのまま適用できるかは慎重に考慮する必要がある。今後も遠隔授業による実習の成果を含めた実践事例が蓄積され、教育方法の改良に向けた継続的な試みが強く求められる。

## 結 語

遠隔授業による小児看護学実習の教育実践を通して、以下の結果と示唆が得られた。

- 1) 本実践を受講した学生の約86%は遠隔授業における小児看護学実習を系統的に整理されていたととらえていた。遠隔授業での実習において学生が実習の系統性を理解し、効果的に学びを深めていくためには、従来の臨床実習での学びの視点を遠隔授業での実習にどのように置き換えた授業設計としているのか、両者を対比しながら学生と教員が何度も共有し進めることが重要と考えられる。
- 2) 遠隔での実習は、授業設計や教育方法の配慮によって、【じっくり考えることができた】、【他の人の考えに触れる機会が多くあった】といった学習上の利点を生むことが明らかになった。学習上の利点をより効果的に高めるためには、遠隔授業での実習において学生に何を深く考えることを方向づけるか、また実習中に他の学生のもつ幅広い着眼点や意見に接する機会をどのように設けるかについて工夫することが重要と考えられる。



## 利益相反の開示

塩飽は一般社団法人すこやかのかの会ふくしまから報酬を受けている。その他の著者が開示すべき利益相反関連事項はない。

## 著者貢献度

すべての著者は研究の構想およびデザイン, データ収集・分析および解釈に寄与し, 論文の作成に関与し, 最終原稿を確認した。

## 文 献

Keller, J.M. (2009) / 鈴木克明監訳 (2010). *学習意欲をデザインする: ARCSモデルによるインストラクショナルデザイン*. (pp.46-58). 京都: 北大路書房.

宮芝智子, 舟島なをみ (2008). 看護技術演習における学習の最適化に必要な教授活動の解明: 目標達成場面・未達成場面の学生・教員間相互行為を構成する要素の比較. *看護教育学研究*, 17(1), 8-21.

文部科学省 (2020a). 新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校, 養成所及び養成施設等の対応について. <https://www.mhlw.go.jp/content/000636112.pdf> (参照2020年10月5日)

文部科学省 (2020b). 遠隔授業等の実施に係る留意点及び実習等の授業の弾力的な取扱い等について. [https://www.mext.go.jp/content/20200501-mxt\\_kouhou02-000004520\\_3.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200501-mxt_kouhou02-000004520_3.pdf) (参照2020年10月5日)

日本看護系大学協議会 (2020a). 新型コロナウイルスの感染拡大にかかる看護系大学への影響及び対応に関する調査 第2弾. <https://www.janpu.or.jp/wp/wp-content/uploads/2020/04/coronavirus-cyousakekka2nd.pdf> (参照2020年10月5日)

日本看護系大学協議会 (2020b). 2020年度COVID-19に伴う看護学実習への影響調査結果 (科目別). [http://www.janpu.or.jp/wp/wp-content/uploads/2020/12/covid19\\_surveyBreport.pdf](http://www.janpu.or.jp/wp/wp-content/uploads/2020/12/covid19_surveyBreport.pdf) (参照2020年12月25日)

鈴木克明 (2006). IDの視点で大学教育をデザインする鳥瞰図: eラーニングの質保証レイヤーモデルの提案. *日本教育工学会第22回講演論文集*, 337-338.

Wiggins, G., & McTighe, J. (2005) / 西岡加名恵訳 (2012). *理解をもたらすカリキュラム設計: 「逆向き設計」の理論と方法*. (pp.15-25). 東京: 日本標準.

吉田玲子, 川名るり, 太田智子, 江本リナ, 鈴木健太, 鈴木 翼, 山内朋子, 筒井真優美 (2016). 小児看護専門看護師が考える小児看護学実習でめざす学生の学び. *日本小児看護学会誌*, 25(2), 53-60.

[2021年1月29日受 付]  
[2021年4月21日採用決定]  
2021年11月5日早期公開済み

# Educational Practice of Pediatric Nursing Practicum Using the Remote Learning Format

Journal of Japan Society of Nursing Research  
2022, 44(5), 697-706  
©2022 Japan Society of Nursing Research  
<https://doi.org/10.15065/jjsnr.20210421128>

Wataru Irie, PhD, RN, PHN, Akiko Sugahara, MSN, RN, CNS,  
Hitoshi Shiwaku, PhD, RN, PHN

Tohoku University Graduate School of Medicine, Miyagi, Japan

## Abstract

**Objective:** To report on the teaching design and educational practice of an online pediatric nursing practicum and present a strategy for effective online practices. **Methods:** From May to July 2020, the University of A offered online nursing practice courses to 30 fourth-year nursing students in three classes of ten students per class. At the end of the course, the students completed a questionnaire survey evaluating the course design and educational practice quality. **Results:** The average overall class rating was  $4.72 \pm 0.46$ . The students' opinions of the class included such positive comments as these: "I was able to learn through good communication with the instructors," "I was able to think carefully," "I had many opportunities to come into contact with other people's ideas," and "It was a learning experience similar to the actual clinical practice." There were also some negative comments, such as "There were few opportunities to consult with the faculty individually" and "The time was too tight." **Conclusions:** To ensure that online nursing courses effectively deliver the same high-quality education as in-person classes, the faculty designing the courses must consider the needs of the students and the technology's limitations.

## Key words

online class, COVID-19, class design, class evaluation, learning

---

**Correspondence:** W. Irie. Email: [wirie@med.tohoku.ac.jp](mailto:wirie@med.tohoku.ac.jp)